

チンギス・カン一族とその系譜

2019/07

横浜歴史研究会

真野信治

—ユーラシア大陸に拡散した子孫達—

はじめに —ある遺伝子学の研究発表—

2003年3月『アメリカン・ジャーナル・オブ・ヒューマン・ジェネティクス』に衝撃の記事が掲載された。遺伝子学者のグループがユーラシア各地から集めた二千人の男性のDNAを調査した結果、その中の数十人に出身地とは関係なく共通するパターンを発見したとの内容。カスピ海から太平洋までの対象区域全般に同一と認められる遺伝パターンを見つけ、それをこの地域の全人口に当てはめると千六百万人が一つの巨大な一族に属するという驚くべき結論に達した。

詳しくは、男性にしかないY染色体の持つ独自の特性を調査し、「クラスター」と呼ばれる家系図をつくり、時空間的に遡り『最も近い共通の祖先』を探り出した。それが三十四世代前という数字が得られ、一世代二十五年平均で遡ると八百五十年前の人物であり、しかも対象地域がただ一か所、つまりモンゴリアに集まっていたとのこと。以上から導き出されるその人物とは何を隠そう『チンギス・カン』であることは間違いないと言う結果であった。その後、オックスフォード大学の研究者も始めは冗談のように思えたが、さらに多くのデータを集めて計算し、この一族の起源として最も可能性の大きい時代と場所を推定したところ、同様の結論に至っている。(ジョン・マン『チンギス・ハン』より)

<2015年インターネットにも同様の記事あり>

英国レイセスター大学のマーク・ジョブリング教授らの遺伝学研究チームが1月14日にオンライン版「Nature」で発表した論文では、アジア人男性のDNAを分析して先祖のルーツを辿った研究が報告されている。研究によれば、現在のアジア人男性の約4割が、チンギス・ハンを含む11人の“偉大な父”のいずれかの血脈を受け継いでいるというのだ。研究は、アジアの中の127の地域に住む計5,321人の男性のDNAを分析し、西暦1100年から紀元前1300年ほどの間の過去に遡って“偉大な父”を突き止める試みを行なった。具体的には、DNAの中の男性にしかない「Y染色体」の塩基配列をサンプリング調査したということである。集められたY染色体を分析してみると大半はまったく共通点のないランダムな塩基配列をしていたものの、分析の数を重ねていくといくつかのグループに分けられることが徐々にわかり、最終的に11のグループの存在が浮き彫りになったということだ。そして調査した男性の約4割にあたる37.8%のY染色体は、この11個のいずれかに分類されることが判明したのだ。実際の人口に照らし合わせると、約8億3,000万人のアジア人男性がこの11人のいずれかの血脈を継いでいることになる。この11人の“偉大な父”の筆頭に挙げられるのが他ならぬチンギス・ハンである。12～13世紀にかけてユーラシア大陸に巨大なモンゴル帝国を築きあげたチンギス・ハンだが、その“直系の子孫”は統計上は今も1,600万人存在しているということだ。おそらくそこには朝青龍や白鵬も含まれているのではないだろうか。チンギス・ハンには本妻の他に幾人も愛人を抱えていたといわれ、一説では生涯で産ませた子供の数は百人を超えているともいわれている。



◆◆現在、チンギス・カンの直系の子孫は学術的に見て1600万人いる◆◆

チンギス・カン

チンギス・カン(成吉思汗)とは？

初名をテムジン(鉄木真)という(1162?~1227)

テムジンは1162年、モンゴル部族のボルジギン氏の首長イエスゲイを父、ホエルンを母として生まれた。若くして父を失い、母に育てられる。テムジンは苦難の末、同族の絆ではなく個人的な主従関係で結ばれた遊牧戦士集団を率い、高原中央部の有力集団ケレイト王国の当主オン・カン(トオリル・カン)と同盟を結び、1196年に金朝に背いたタタル部をオン・カンと共同して討伐し、同族の諸氏族を討って頭角を現した。1203年、オン・カンと仲違いしたテムジンは、これを倒してケレイト王国を併合し、翌年には高原西部の強国ナイマンを滅ぼした。テムジンのもとにはコンギラト、オングトなど周縁部の有力部族集団も服属するようになり、モンゴリアを統一したテムジンは、1206年初春、ココ・ナウルに近いオノン川上流の河源地において開かれたクリルタイ(大集会)において「あまねきモンゴル」のカン(王)に推戴され、チンギス・カンと称した。この即位によってモンゴル帝国が成立した。漢字では成吉思汗と書く。後に成立した元王朝では太祖という称号を贈られている。チンギス=ハンは千戸制という強力な軍事・行政組織を作り上げ、「ヤサ」といわれる法令を制定して広大な国土を支配した。



モンゴル部族の系譜

チンギス・カンの生涯を描いたモンゴルの伝説的な歴史書『元朝秘史』によれば、その遠祖は天の命令を受けてバイカル湖のほとりに降り立ったボルテ・チノ(「蒼き狼」の意)とその妻なるコアイ・マラル(「青白き鹿」の意)であるとされる。ボルテ・チノの11代後の子孫ドブン・メルゲンは早くに亡くなるが、その末亡人アラン・ゴアは天から使わされた神人の光を受けて、夫を持たないまま3人の息子を儲けた。チンギス・カンの所属するボルジギン氏の祖となるボドンチャルはその末子である。ボドンチャルの子孫は繁栄し、様々な氏族を分立させ、ウリヤンカイ、ジャライルといった異族を服属させて大きな勢力となった。やがて、ボドンチャルから7代目とされるカブルが初めてモンゴル諸部族を統一して「あまねきモンゴル」のカン(ハン、ハーン)の称号を名乗り、カブル・カンの子孫はキヤト氏を称するモンゴル部の有力家系となった。チンギス・カンの父イエスゲイ・バートルは、カブル・カンの孫で第3代カンとなったクトラ・カンの甥である。



モンゴル族の始祖
アラン・ゴアと
その息子たち

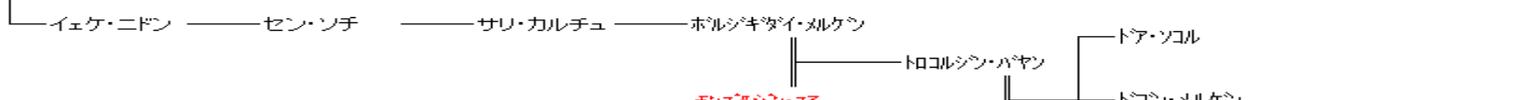
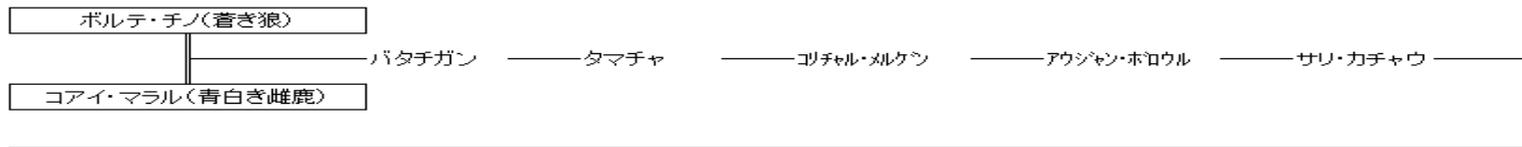


カブル・カン



イエスゲイ・バートル

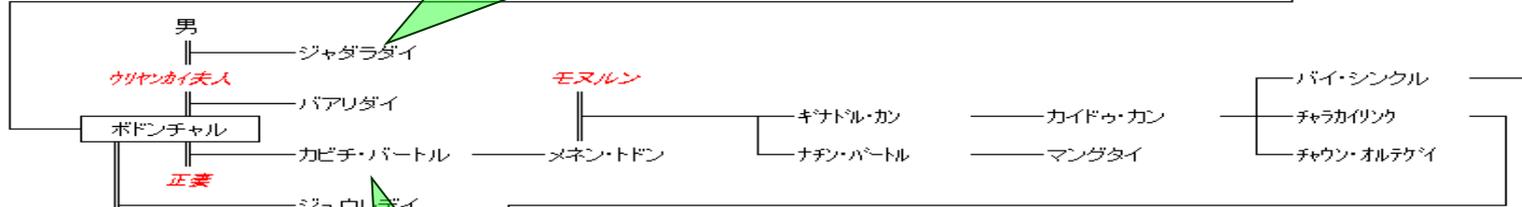
チンギス・カン以前のモンゴル部の系図



ジャダラン氏⇒**ジャムカ**

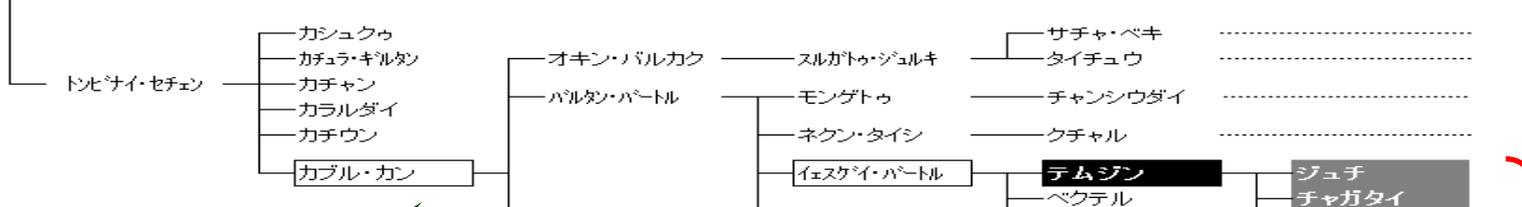
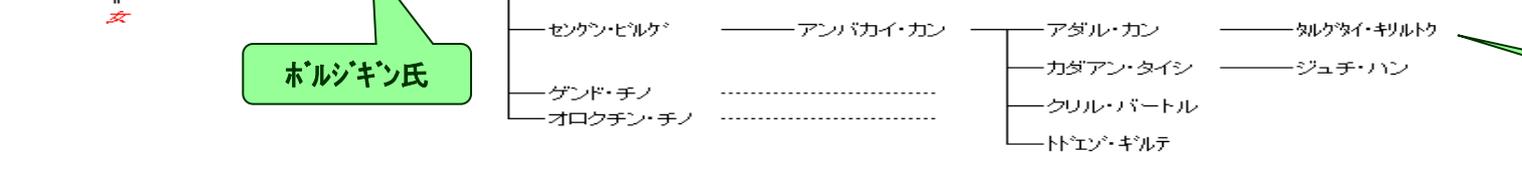
アラン・コア
 日月の精

ベルヌウト氏
 カタギン氏
 サルジウト氏



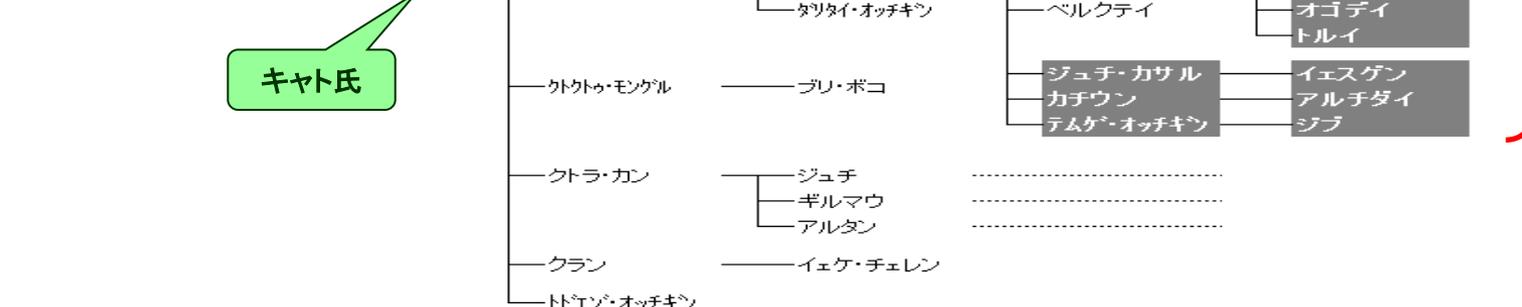
ボルジギン氏

タイチュウト氏



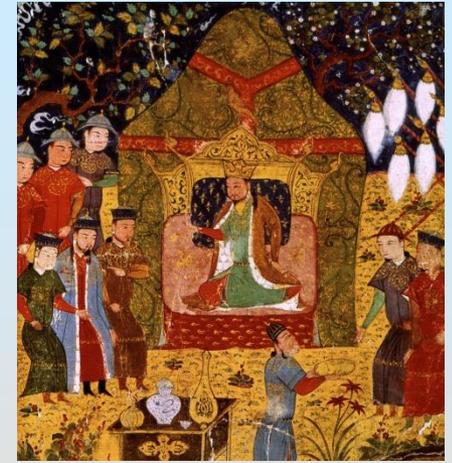
キヤト氏

黄金の氏族
 (アルタン・ウルク)



①テムジン即位までの戦い

オノン川上流での大クリルタイで即位する



| | | |
|-------|-------------|------------------------------|
| 年不詳 | セレンゲ川の戦い | 対メルキト族 奪われた妻のボルテを奪還 |
| 1189年 | 十三翼(クエン)の戦い | 対ジャムカ 敗れたが勢力を伸ばすために得るものはあった |
| 1195年 | タタル族との戦い | この戦いの功績を金国に認められ、百戸長の称号をもらう |
| 1199年 | キジル・バシュの戦い | 対ナイマン族 族長ブイルク・ハンを討つ |
| 1200年 | タイチュウト族との戦い | メルキト族と手を結んだタイチュウト族を撃破した |
| 1202年 | コイテンの戦い | 対諸部族連合軍 この戦いでテムジンは首を負傷する |
| 1203年 | カラカルジト砂漠の戦い | 対ケレイト 不意打ちを食らったテムジン軍はバルジュナ湖へ |
| 1204年 | ラクダ原の戦い | 対ナイマン族 首領のダヤン・ハンを討つ |
| 1205年 | 西夏攻略 | 対西夏 初めての城塞都市の攻略戦 |

②チンギス・カン即位後の東西征服戦争

永遠のライバル ジャムカ

同じモンゴル部のジャダラン氏族の族長であったジャムカはテムジンのアンダ(盟友)であり、後にはライバルとなった。十三翼の戦いでテムジンに勝利したが、人望を失ったことは否めず、その後は常に対抗勢力として戦いを仕掛けてくることとなる。しかし、テムジンがナイマン族を攻略した際に寄寓していたジャムカは捕らわれることとなり、貴族に対する血を流さない方法で処刑された。当時の遊牧民の間では、テムジン同様に英雄の気質があり、支持する種族も多く、場合によってはジャムカが成吉思汗になっていた可能性もなくはない。

| | | |
|-------|-----------|---|
| 1211年 | 第一次金国攻略戦争 | 対金国 1214年に首都であった中都(現在の北京)を占領。燕雲十六州を支配した。金の王侯は黄河を越えて南の開封に逃れたが、これが第1次対金戦争。外交戦略で契丹族などを寝返らせ、内部崩壊させたことが勝利に繋がっている。 |
| 1218年 | 西遼討伐戦 | 対西遼 トルキスタンに逃れていたナイマン王(西遼の王位を奪っていた)を滅ぼした。西遼に服属していた西ウイグル王国もモンゴル支配下に入り、ウイグル人はモンゴル帝国を支える官僚層となった。 |
| 1218年 | 中央アジア征服戦争 | 対ホラズム王国 さらに西進したチンギスはマー・ワラー・アンナフル(アム川とシル川の間土地)に入ってサマルカンド、ブハラなどを破壊し、当時中央アジアの強国であったホラズム王国を征服、イランにも侵攻した。 |
| 1221年 | インダス川の戦い | 対ホラズム ジェラール・ウッディーン追討戦 |
| 122x年 | タカルカ川の戦い | 対ロシア・ブルガル諸侯 ジェベ・スプタイ將軍の遠征 |
| 1226年 | 西夏再攻略戦 | 対西夏 モンゴル高原の南に位置する黄河上流オルドス地方の西夏を攻める。口実は西夏が西征軍への参加を拒んだことにあった。モンゴル軍は大軍で都の興慶を囲んだ。しかし陥落前にチンギスはさらに南方の六盤山に移り、そこで逝去したことになる。 |

チンギス・カンの遺産相続

チンギス・カンの死後、その遺骸はモンゴル高原の故郷へと帰った。『元史』などの記述から、チンギスと歴代のハーンたちの埋葬地はある地域にまとまって営まれたと見られているが、その位置は重要機密とされ、『東方見聞録』によればチンギスの遺体を運ぶ隊列を見た者は秘密保持のために全て殺されたという。また、埋葬された後はその痕跡を消すために一千頭の馬を走らせ、一帯の地面を完全に踏み固めさせたとされる。

チンギスは生前より、四人の子と三人の弟に広大な領地を分割する案を提示していた。つまり、長男ジュチには南西シベリアから南ロシアの地まで将来征服しうる全ての土地を、二男チャガタイには中央アジア西遼の故地を、三男オゴデイには西モンゴル及びジュンガリアの支配権を与えるというものだ。末子トルイにはその時点では何ら譲渡はなかったが、チンギスの死後に本拠地モンゴル高原が与えられることになっていた。さらに三人の弟及びその遺族にはモンゴル東部の大興安嶺方面の広大な土地を、北からジュチカサル家、テムゲ家、カチウン家の順番に分封することを明示している。これにより、中央ユーラシアのほとんどをこの『黄金の一族』が統治することとなり、なかには15世紀まで続いたウルス（国家）もあり、チンギス・カンとその一族の繁栄が窺える。また、チンギスは土地と共に部族民をも同様に子らと弟達に分封している。

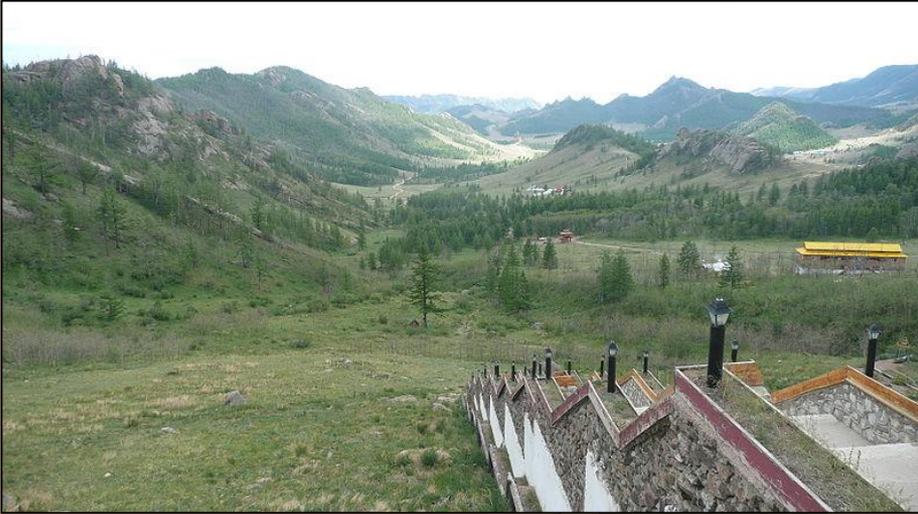
晩年のチンギス・カン



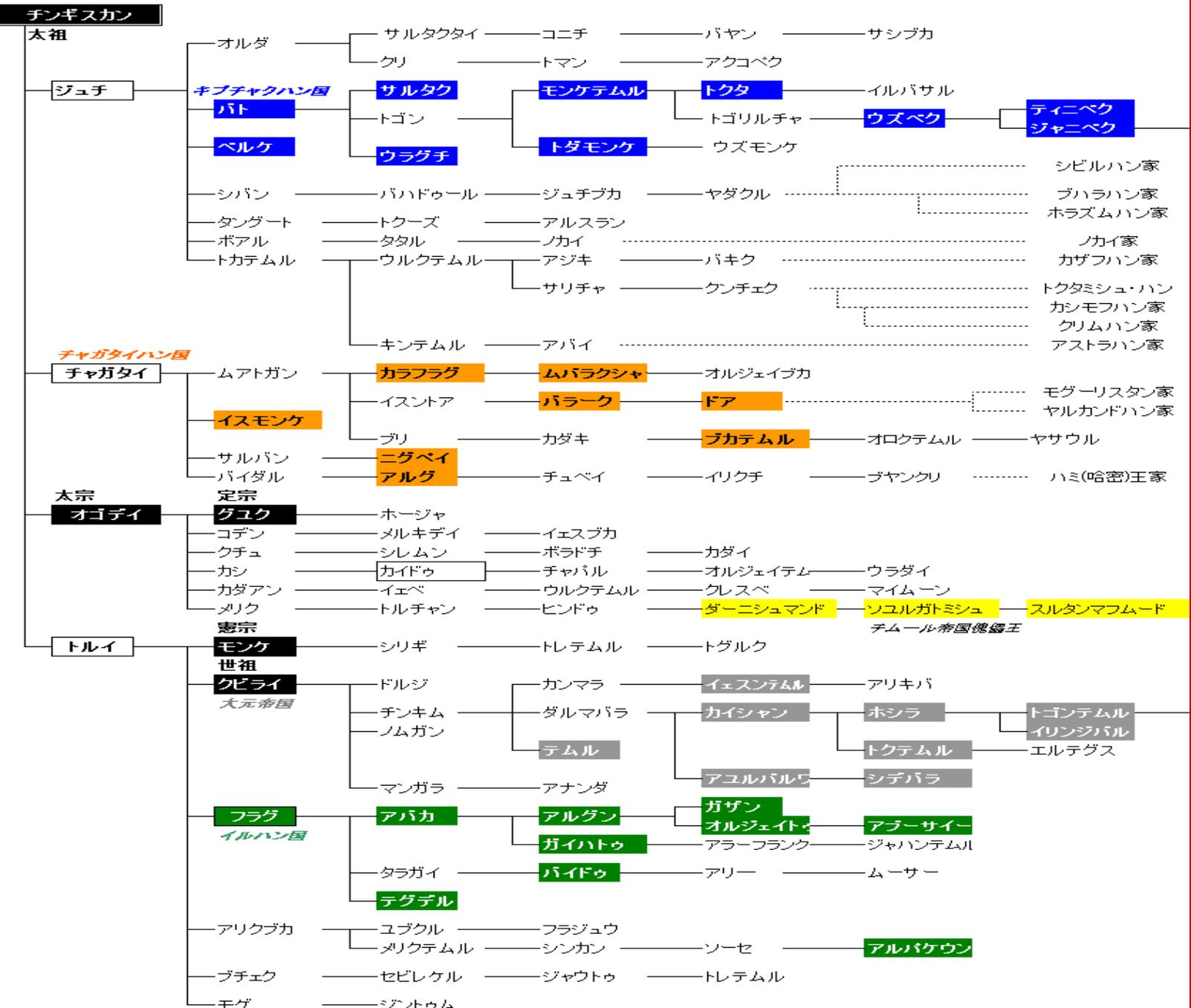
チンギス・カンの諸子諸弟への分封

| | | |
|---------------|----------|--------------|
| チンギス・カンの軍隊 | | 総勢 129,000 人 |
| (129人の千人隊長) | | |
| ジュチ | 第一子 | 4,000 |
| チャガタイ | 第二子 | 4,000 |
| オゴデイ | 第三子 | 4,000 |
| 西方三王家の合計 | | 12,000 |
| テムゲ・オッチギン | 末弟 | 5,000 |
| ホエルン・エケ | 母 | 3,000 |
| アルチダイ | 三弟カチウンの子 | 3,000 |
| イエグウ、トク、イエスンゲ | 次弟カサルの子 | 1,000 |
| 東方三王家の合計 | | 12,000 |
| (コルゲン) | 庶子 | 4,000 |
| トルイ (最高統率者) | 第四子 | 101,000 |

チンギス・カンが眠ると言われるヘンテイ山脈付近



チンギス・カン家正統四息の後裔



ジュチウルス

チャガタイウルス

オゴデイウルス

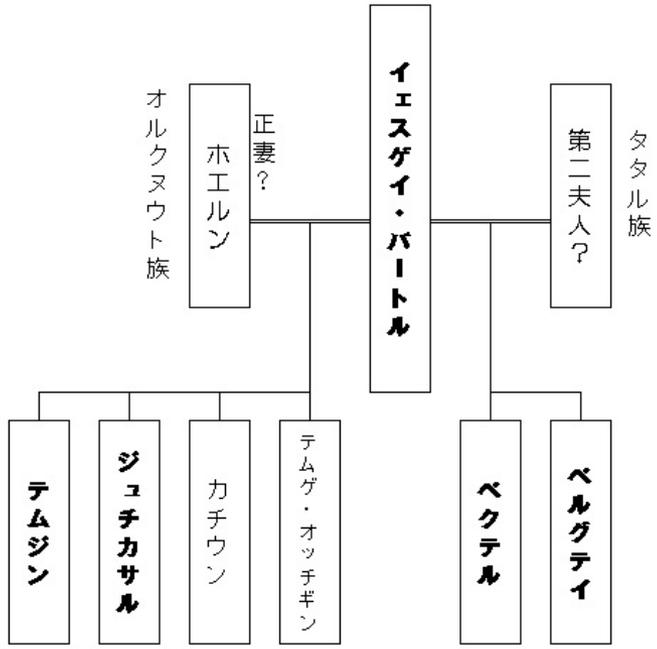
大元ウルス

フレグウルス

テムジン出生の謎～異母弟殺害事件

テムジンの母は、父イエスガイが略奪で得たオルクヌウト氏出身のホエルンである。略奪という事は、既にメルキト族のチレドゥという男に嫁いでいたと見なされるが、例によって『元朝秘史』の記述をもとにしており実際の関係はどうであったのかはわからない。実は、その際にチレドゥの子を宿していたのではないかとの噂があり、それがテムジンであるとのこと。信憑性は非常に低いが、親族などのごく近い関係者の間でそのような噂がなかったとも言い切れない。当のテムジンは、当たり前如く父の後継者として振舞い始めている。

このテムジン出生の疑惑と関連付けされるのが『元朝秘史』のみが伝えるテムジンによる異母弟ベクテル殺害事件である。これは、父の死後残された兄弟たちが助け合って生きていかねばならない状況下で、テムジンとカサルが別腹の兄弟ベクテルを射殺してしまったという出来事である。時期は不明だが、イエスガイには第二夫人が存在し、ほどなくその第一子ベクテルが生まれる。テムジンの年下と思われるが確証はなく、年上の兄かもしれない。その弟のベルグテイのほうは実在の人物で、ジュチカサルより年下であることはほぼ確実である。このベクテルはイエスガイの死後、こちらも後継者として名乗りを上げていた可能性があり、普段の生活の中でも、決してテムジンを経長とは認めない行動が目立ち始めていた。ベクテルの、家長は自分だという主張の根拠は何なのであろうか。ここで引っかかるのが、テムジンの出生疑惑である。井上靖の小説『蒼き狼』にもその辺りの状況(ベクテルの疑念)に触れており、一方で、自分は本当は誰の子なんだ？と終生そのことを思い悩んだチンギス칸をも描いている。さらに、ベクテルが死に際に、どうせ死ぬなら他部族の者(テムジン)にやられるより、同族のカサルの矢を受けて死にたいから、カサルから射よ！と言って死んでいったそのセリフが印象に残る。



整理してみるとベクテルが後継者であると主張する理由は、ふたつの可能性がある。一つはテムジンはイエスガイの実子ではないとする理由と、もう一つは、ひょっとして略奪婚のホエルンこそが第二夫人であり、実はベクテルの母親が本妻(第一夫人)だったという理由である。出生疑惑はほぼあり得ないことと思われるが、ホエルンとベクテルの母の立場がどうであったかということになると、判断は難しい。イエスガイがテムジンの妻を見つけるためと言いながら、母の出であるオルクヌウト族を目指して二人で旅に出た。結果的にコンギラト氏のデイ・セチェンのもとに花婿奉公としてテムジンを残してきたのだが、どうも体のいい厄介払いのような気がしてならない。イエスガイが先々テムジンとベクテルの衝突を意識してテムジンの方を遠ざけた感もあり、その際ベクテルの方を主に考えていた可能性もある。つまり、ベクテルを正統の後継ぎと決めていたのかもしれない。さらに後にタイチュウト氏はテムジンを捕まえるわけだが、その理由を、対抗馬として危険人物だから早いうちに芽を刈り取るためと考えられるが、兄弟殺しの罪状を持って捕縛したと想定することも不自然ではない。こう考えると、テムジンは庶子でありながら、嫡子の兄弟を殺して自分が正統の後継ぎの椅子を得たとの仮説が成り立つ。後にメルキト族が妻ボルテを拉致した際に、この第二夫人も同様に捕縛されたが、ひょっとして正妻であった彼女こそが拉致の対象であった可能性もある。

参考資料

史籍・文献

- 『元朝秘史』、『元史』、『聖武親征録』
- 『集史』ラシード・ウッディーン
- 『五族譜』、『ムイッズ・ル・アンサーブ』
- 『世界征服者の歴史』ジュワイニー
- 『モンゴル帝国史』全6巻 ドーソン

旅行記

- イブン・バットゥータ 『大旅行記』
- カルピニ, ルブルク 『中央アジア・蒙古旅行記』
- マルコ・ポーロ 『東方見聞録』

書籍

- ルネ・グルセ『アジア遊牧民族史』(上)(下)
- 佐口透 編『モンゴル帝国と西洋』(東西文明の交流 4)
- 本田実信『モンゴル時代史研究』
- 岡田英弘『モンゴルから世界史を問い直す』
- 杉山正明『大モンゴルの世界 陸と海の巨大帝国』、『モンゴル帝国の興亡〈上〉〈下〉』
- 『モンゴル帝国と大元ウルス』、『モンゴル帝国と長いその後』、『逆説のユーラシア史』
- 『中央ユーラシアの歴史構図』(岩波講座世界歴史11)

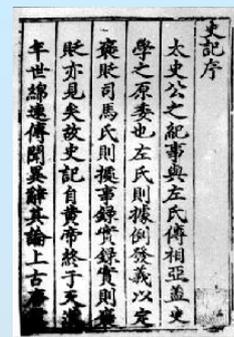
- 志茂碩敏『モンゴル帝国史研究 正篇』
- ロバート・マーシャル『モンゴル帝国の戦い』
- ジャック・ウエザーフォード『パックス・モンゴリカ』
- ジョン・マン『チンギス・ハン』
- 堺屋太一『チンギス・ハンの世界』
- 川本正知『モンゴル帝国の軍隊と戦争』
- 赤坂恒明『ペルシャ語チャガタイ語諸史料に見えるモンゴル王統系譜とロシア』スラブ・ユーラシア叢書12
- 歴史群像シリーズ『草原の英雄“蒼き狼”の覇業』(チンギス・ハーン上巻・下巻)

論文

- 加藤和秀「チャガタイ・カン国の成立」
- 堀江雅明「テムゲ・オッチギンとその子孫」
- 宇野伸浩「チンギス・カンとジョチ・カサル」人間環境学研究11 2013年2月
- 宇野伸浩「チンギス・カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組」国立民族学博物館研究報告別冊20号
- 松田孝一「オゴデイ諸子ウルスの系譜と伝承」
- 村岡倫「シリギの乱」、「カイドゥと中央アジア-タラスのクリルタイをめぐる-」
- 北川誠一「ジョチ・ウルスの研究」-ジョチ・ハン紀 訳文1、2
- その他



『元朝秘史』



『元史』



『集史』

